

十市遠忠三十番歌合について

井上 宗雄

中世、鎌倉・南北朝・室町・戦国時代の和歌作品は、現在かなり大量に残されている。その内、南北朝時代までのものは相当多く活字化されて来たが、室町・戦国期のものは埋もれているものが多い。和歌史研究においても、室町・戦国期を専門とする人は少なく、今後開拓されねばならぬ重要な分野である。

一九九五年十一月東京古典会の『もくろく』（古典籍下見展観大入札会目録）に次のような書が写真版と共に揭示されていた。

遠忠三十番自歌合

十市遠忠自筆清書
理寛院応劔判
写真版二二頁掲載

一卷

写真版により調べると、前田育徳会尊経閣文庫に蔵せ

られている伝本と同じようだが、この本は他に全く伝本がなく、しかも掲出本は十市遠忠の清書本という。尊経閣本が、判詞など細字でやや読みにくいのに対し、この本は能筆で読みやすい。目録を一見しただけで、いわゆる稀本であり、貴重な伝本であることが知られ、幸い図書館に収蔵の運びとなったのである。

遠忠（一四九七—一五四五）は大和の豪族、戦国武将で、すこぶる文事を好み、京の、清原宣賢・三条西実隆および公条・富小路資直ほか多くの文化人と交渉があり、『李花集』『清輔朝臣集』ほか多くの歌書を写し、また自ら催した歌合や、家集（幾冊かの日次詠草）も大量に残している注意すべき歌人である。

『中世歌合伝本書目』によると、遠忠の関与した歌合は、自歌合を含めて十三ヶ度に上るが、上記もその一つである。

簡単に書誌を記しておく。

一卷（二軸）本。本文料紙は楮紙まじりの鳥の子紙（裏打ちがある）。天地二五・〇糎。墨付十五紙つき。一紙はほぼ二九・五糎（第一紙は三一・五糎、第十五紙は二八・八糎ほど。冊子改装本の可能性がある）。本図書館に収蔵後、補修を加え、裏打ちをして、現在天地二八・三糎。本文の前に「早稲田文庫」と朱の印記を押した紙を貼り、唐草模様の緞子の表紙を付し、桐箱に納める。函架番号は特へ四・八〇六九。

内題なく、一首は一行書き、一紙二十行。遠忠筆かどうか微妙な所だが、同時代の書写であることは確かである。

なお二五・〇×二・〇糎ほどの細長い小紙片があり、上部に「十市遠忠」とあり、下方に「三×〇・七糎ほどの小紙片に「ト参拾号」とある貼紙を貼るが、筆跡は

本文よりは下った時代のもので、仮題簽であつたのかもしれない。

尊経閣本は計五ヶ度の歌合を合して一冊となしている。包紙に、

五十番歌合 十市遠忠筆
外四種歌合

と直書きで記す。函架番号は什上五四。扉（遊紙）の貼紙に、五つの所収歌合名を記している。

目次

一、五十番歌合

一、三十番歌合

一、三十番歌合

但廿二番判詞ノ末ヨリ廿六番
左歌マテ欠脱

一、五十番歌合

一、五十番歌合

早大本と同じものは三つ目の「三十番歌合」である。和歌は一首一行書きで、判詞はかなり小字で記されている。

る。扉裏（遊紙裏）左下に二枚の貼紙（細長い紙片）があつて、一枚には、

六拾壹枚内

明治十五年二月八日しらへ
三枚不足 橋山隆清

とあり、もう一枚には、

紙数六十一枚

但し表紙トモ

とある。こちらの紙片は江戸期のもと思われる。そして上記の扉の貼紙と、扉裏の紙片とにあるように、本文中、二十二番判詞の尾部から二十六番左歌まで（三枚分）何時の頃か切斷されたのである。

これに対して早大本は完本であり、その点、実に貴重な伝本といえるであろう。但しなお若干の問題が伏在している。

この歌合は一番ずつ題が異り、判および判詞もきちんと記されている。具体的な形を示すために、一番を早大本により掲げ、尊経閣本との相違は、右に（ ）に入れて記しておく。

一番

左 初春霞 勝

兵部少輔中原遠忠^{（仲）}

十市遠忠三十番歌合について

春のくる色にみえても朝かすみまた立やらす山^{（見）}
かせそふく^{（風）}

右

（李阿）

さほ姫の袖ふる山の朝かすみ立より四方の春そしらる、

左哥春きてもいまた光すくなく山風のはけしき心

をふくみ侍り右哥棹姫のおほふ袖に初陽の色さた

〔虫^{（かな）}〕るよしとりくにあらしひへるすかたわ

きかたく侍を結句なとつよく聞てなを左の朝

かすみ立まさりなんや^{（霞）}

精査したわけではないが、本文の異同は少ないようである。ただ大きく異なるのが、尊経閣本は、右の一番右に「李阿」という名があり、しかもこの名が五番ごとに（遠忠との対比で）記されているのである。更に他の資料を見合わせると、この歌合の各番の一首は遠忠の「詠草」（尊経閣文庫蔵、私家集大成7所収、「遠忠I」）にみえる歌である。記述の煩を避けて、内容を次の形で示してみよう。

以下、番数（漢数字で示す）、題、作者名ある場合はその名、判、「詠草」の歌番号（私家集大成番号）を掲げる。

一 初春鶯 左遠忠、右（李阿） 左勝 左五三

○（一番左歌が詠草五三〇番歌）

二 雪中鶯 右勝 左五三一

三 春月 右勝 左五三三

四 山華盛 左勝 左五三六

五 巖上藤 持 左五三九

六 聞郭公 左（李阿） 右遠忠 右勝 右五四

○

七 採早苗 左勝 右五四一

八 五月雨 右勝 右五四二

九 庭夏草 左勝 右五四三

十 納涼風 持 右五四四

十一 早秋露 左遠忠 右（李阿） 持 左五四五

十二 鹿交萩 持 左五四七

十三 滝辺月 持 左五四九

十四 遠擣衣 右勝 左五五〇

十五 嶺紅葉 持 左五五一

十六 時雨晴 左（李阿） 右遠忠 持 右五五二

十七 落葉深 左勝 右五五三

十八 河千鳥 持 右五五五

十九 暮山雪 左勝 右五五八

二十 古屋霰 持 右五六三

廿一 寄月恋 左遠忠 右（李阿） 持 左五六四

廿二 寄閑恋 左勝 左五六五

廿三 寄鳥恋 右勝 左五六六

廿四 寄木恋 右勝 左五六七

廿五 寄衣恋 持 左五六九

廿六 名所山 左（李阿） 右遠忠 持 右五七〇

廿七 羈中友 持 右五七二

廿八 薄暮煙 左勝 右五七五

廿九 古寺鐘 左勝 右五七六

卅 寄道祝 持 右五七七

右の如くであり、「遠忠詠草」所収歌は遠忠の詠であることは間違いない。念のためその巻頭部分を書き出し

てみる。

詠三十首和歌

遠忠

初春霞

薄かすみ山もほのかに出る日の 春たつ空をよそに

しらせて(五二九)

○春のくる色は見えても朝霞 また立やられて山風そふ

く(五三〇。一番左歌)

の如くで、一題一首しかないものもあるが、二首以上のものも多く「暮山雪」など七首もある、それを某に見てもらつて合点を受け(多くは○が付いている)、三十首和歌が成立、それを歌合の歌としたらしい(なお歌形が若干変わっているものもある。歌合歌の形が、添削の結果か後案の形かであらう)。上記の詠草の歌の番号が飛んでいるのは右のような故である。

かくして、遠忠歌は、一〇五左、六〇十右、十一〇十五左、十六〇二十右、二十一〇二十五左、二十六〇三十右の歌ということになる。それでは番えられた一方の歌(一〇五右以下)は誰の歌か。「遠忠詠草」にはない。

十市遠忠三十番歌合について

自歌合という古典会の『もくろく』通りなら遠忠の(詠草不載の)歌であるが、果してそうであらうか。

早大本は奥に、

右者両吟判理覚院 応献

とあり、尊経閣本には、

右者享禄二冬両吟書之番仍両三度哥合共

皆以隱名者也 判理覚院

とある。

「遠忠詠草」(遠忠I)は大永七年(一五二七)および享禄二年から三年(一五三〇)初めまでの詠草で、上記三十首は「寄道祝」五七八番歌の次に(享禄二年)「霜月十五日初而同廿一日詠畢」とあり、この三十首は二年十一月の詠である。上記のように両伝本奥書に「両吟」とあるから、二人による詠を番えたものであり、一方が遠忠なら一方は別人で、まずそれが尊経閣本にある李阿であることは推察に難くない。

李阿の伝はよく分らないが、細川氏または三好氏に仕えた時衆と思われ、この頃、遠忠と親交があり、五十

番歌合や三十番歌合（この三十番歌合と合綴されている）も遠忠との歌と番えたものである（なお井上『中世歌壇史の研究』^{室町後期}参照）。

なぜ早大本は、五番ごとに遠忠の名を記して、相手の李阿の名を落したのであるうか。その理由は不明だが、五番ごとに作者が左から右、右から左へと、移動するのは、尊経閣本の奥書から推察すると、匿名で判者に差出す時に、どこかで作者が分ってしまう虞れないように、敢てこういう形にしたのであるうか。遠忠の名を五番ごとにせれば、他は別人であることが知られるのだが、そこに李阿の名を記すのに何か事情があったか、単なる忘失であったかであろうが、解明は今後の課題である。

なお理覚院応猷は冷泉為広の子、寺門の理覚院の僧となり、法印僧都に至った。和歌・連歌・鞠をよくし、この時期の和歌事蹟は多い。遠忠とも親交があった（上掲拙著参照）。

この歌合は、自歌合ではなく、遠忠・李阿による三十番歌合で、享禄二年十一月に遠忠が詠じた三十首歌を基

に、その冬の内に結番し、そののち応猷の判を受けて成ったものである。それは早大本・尊経閣本・遠忠詠草を総合することによって知られるのである。

京都と強い交流を持った在地の歌合であるが、戦国武人であった遠忠、時衆と目される李阿の詠作、冷泉家の流れを汲む僧侶歌人応猷の懇切丁寧な判詞、更には遠忠詠草を見合せることによって、歌合が成立する一パターンを知りうることなど、戦国期和歌のあり方を探り得る注意すべき資料であり、とりわけ早大本は完本として貴重で、室町・戦国期和歌に関心ある人によって今後詳しく（翻刻を含めて）検討されるべき歌合といえるであろう。

付言すると、本学図書館には、歌書とりわけ中世関係の歌書に貴重なものがある。その一部は『^{早稲田大学蔵}資料影印叢書』（中世歌書集『三冊』）に収めたが、その後も、『図書館紀要』42（95・12）に兼築信行解題・翻刻による『拾葉和歌集序』など注意すべき鎌倉期の歌書が収蔵された。また最近収蔵のものに『歌伝秘書』（二冊、延宝六

年写)がある。内容は「八雲口伝」(詠歌一体)で、日本歌学大系所収本と同系だが、奥書が注意される。

此一帖以祖父入道大納言為家卿自筆本令書写校合訖尤可為証本矣

右近權中将為秀判

此詠歌一鉢以後小松院震筆御本書写校合畢

前大納言入道榮雅判

此一冊亡父一位祖父榮雅以自筆本安藤源左衛門尉依戀志書之遺也

天正六年霜月十三日

重雅

(次に延宝六年二月從五位上保純の書写奥書があるが略)

なお北駕文庫本『和歌詠草』(八雲口伝)に、為秀および後小松院筆本を写したという榮雅の奥書に続き、「此一冊依亡父一位入道高雅門弟之儀江雪斎戀志之条以榮雅自筆令書写遣之者也 天正四年五月廿二日 重雅(花押)」とあり、これは重雅筆本であるが、為秀―後小松院―榮雅筆本を所持していた重雅が、榮雅筆本により写して江雪斎(北条氏の臣岡江雪)に遣したのである。早大

本は、亡父一位(飛鳥井雅綱、号高雅)の祖父である榮雅(雅親)の筆本により安藤源左衛門尉に写し遣した、というのであろう。北駕本より二年後のことである。重雅はいささか注意すべき人物で、古河公方とそこに仕えた一色直朝と関係が深く、富田勝治・赤瀬信吾・佐藤博信論考を引いて久保賢司「古河公方足利義氏期の「連判衆」に関する一考察」(学習院史学 33, 95・3)に考察がある(重雅と目せられる自庵が義氏に『詠歌大概』を進上した事実を指摘している)。以上二つの奥書によって、重雅は雅綱(従一位権大納言。一位は飛鳥井家初例)の子であるのは確かで、重雅は号(法名か)であろう。詳しい伝は不明だが、東国においても活躍し、天正六年十一月まで生存していたことが知られる。室町・戦国期の和歌史は、資料も散在して多いのだが、こういう細かい事蹟を集積して組み立てて行くことが重要なので、この『歌伝秘書』も貴重な資料といえるのである。